「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」
学術知共創プログラム 中間評価結果

課 題	C：新たな人類社会を形成する価値の創造
研究テーマ名	よりよいスマート WE を目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ
研究代表者	出口 康夫
所属機関・部局・職	京都大学・大学院文学研究科・教授
総合評価	
C 研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である（研究の中止）	
評価コメント	
<p>本研究テーマは、確かな哲学的な知を工学的な技術と結びつけ、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いに基づく「大きなテーマ」を設定し、具体的な解決策を提示するというきわめて挑戦的なものだった。</p> <p>具体的には、大きく、1) 哲学的アプローチ：「『できなさ』を基軸とする人間観や脱私中心的な自己観といったオルタナティブな価値観を、東アジアなど非西洋の思想伝統から析出する」と、2) 工学的アプローチ：「課題解決のための具体的ツールの実証という現実に密着した次元にまで接続」を結びつけることにより、「WE 問題の解決策を具体的に提案する」ことが目指された。</p> <p>今回、中間評価の際に出された研究成果報告書等からは、1) に関しては、シンポジウムや一般向け講演、論文執筆など、活発な研究活動を行い、一定の良い成果を出し、発信に努めていることが伺い知れた。一方、2) に関しては、2つの実証実験と、e-ヒトとの関係が明確になるような実験計画や仮説、期待される成果が何であり、計画していた実験の失敗や遅延を踏まえた今後の取り組み方策は何であるのかが不明瞭であった。また、支出内訳を見ると、委託費の多くが雇用経費に費やされており、直接の研究活動への支出が少なく、実験や実証などの研究活動が十分になされたのかが懸念された。</p> <p>本研究テーマの目的が、2つのアプローチの協同とフィードバック循環にあった点を考慮すると、2) における研究の遅延の影響は1) にも及ぶおそれがある。2) に関する再建計画の記述が十分に記載されていないことは、誠に遺憾であり、今後の研究の進展に懸念があることから研究の中止という判断もやむを得ないという結論に至った。</p>	